

クライエントの対人関係における悪循環への介入

福 村 香 菜

さかの医院

Intervention in a vicious circle of client's interpersonal relationship

Fukumura Kana

Sakano Clinic

抄録：精神科ソーシャルワークにおいて、過去の対人関係での傷つきから、クライエントが後に関わる他者や環境に対しても強い不信や不安感、怒りを抱き、信頼関係を築くことが困難なケースが多数存在する。相互性に欠ける関係性の中では社会資源を有効に活用できず、クライエント自身の持てる能力が十分に発揮されない。そしてさらに、クライエントの自尊心の低下をもたらす。本稿では、クライエントとの信頼関係を形成する試みを通して、ワーカーークライエント関係の中で繰り返される悪循環のパターンの一部が変化した事例を報告し考察を加えた。ワーカーークライエント関係を通しての対人関係の再体験が、社会的活動参加への動機づけを高め、就労に繋がった事例である。

キーワード：対人関係、悪循環、受容的態度

1 はじめに

精神科ソーシャルワークにおいて、過去の対人関係での傷つきから、クライエントが後に関わる他者や環境に対して強い不信や不安感、怒りを抱き、信頼関係を築くことが困難なケースが多数存在する。

相互性に欠ける関係性の中では社会資源を有効に活用できず、クライエント自身の持てる能力が十分に発揮されない。そしてさらに、クライエントの自尊心の低下をもたらす。

本稿は、クライエントとの信頼関係を形成する試みを通して、ワーカーークライエント関係の中で繰り返されるクライエントの対人関係における悪循環のパターンの一部が変化した事例を報告したい。変化の要因として、逆転移が起こる中でワーカーが一貫した態度を保とうと努めたこと、ワーカーークライエント関係の治療的働き、そして、それらの基盤にはスーパービジョンの存在があった。

ワーカーークライエント関係を通しての対人関係の再体験が、社会的活動参加への動機づけを高め、就労に繋がった事例である。本事例は、プライバシー保護のため、事例の趣旨が損なわれない程度の変更を加えている。

2 ケース概要と面接までの経過

(1) ケース概要

A 氏は、20代男性で、筆者の勤務する精神科診療所において担当したケースである。診断名は軽度知的障害、気分障害である。

(2) 生活史

O 県にて出生。小学低学年時に知的障害を指摘されるも、普通学級に通い、成績は下位であった。同級生からいじめに遭い、万引きを強要されることもあった。母親は不在が多く、父親には習い事を強制

されたという。高校生時、両親が離婚。卒業後、就職が決まらず、ボランティアをしていたところ、知能検査を勧められ、X-6年療育手帳取得。

(3) 面接までの経過

X-4年、障害者枠で就職したが、配置転換等でストレスをため過呼吸が出現。2年数ヵ月勤め退職。その後、意欲低下、引きこもりがちの生活となり、X-1年、当診療所を受診。同時に、ハローワークの担当者の勧めで、地域活動支援センターI型（以後I支援センターと表記）への通所も検討された。

X年2月、「仕事について相談したい」とA氏から連絡があり、筆者の面接が始まった。

3 A氏の対人関係のパターンと対処法

(1) 初回面接（X年2月）

面接でA氏は「父親から仕事することを期待されているが、Drの許可が出ていない」と眉間にしわを寄せ不満そうに話した。A氏自身はどのように考えているのか筆者が尋ねると「働きたいが、Drストップがある以上は仕方ない。初診の時Drに1年から数年かかると言われた」と話す。また、Drからは、内職作業をやっている地域活動支援センターIII型（以後J支援センターと表記）の通所も勧められていたが、「狭い部屋に大人数居るのが耐えられない」ため行っていないという。施設の利用自体は、「孤独感を埋めるため」に行こうと思うが、「人が苦手」と述べ、仕事に関しては、「仕事に行けという父親が一番のストレス」と、相反する感情や対人関係の難しさがうかがえた。今後の希望について「外に出て人と話す機会をつくりたい。話す訓練がしたい。コミュニケーション能力が無い」と述べ、筆者との面接を希望した。〈今まで対人関係で困る事があったのですか？〉と筆者が尋ねると、「かなりあった。しかめ面していると、怒っていると勘違いされて嫌われた」と答えた。筆者は、仕事を始める具体的な時期について改めてDrと相談することと、場合によっては診察に父親も同席してもらってはどうかと提案し、面接は終了した。

(2) 対人関係における悪循環の再現

（X年3月～6月）

X年3月、A氏は直接にやって来て「障害年金を受けられることになり、貯金もできそう。父が優しくなり、ゆっくり休みなさいと言ってくれた」と最近の状況について話した。また、仕事について「コミュニケーションが出来るようにならないと働けないと思う」と、I支援センターの通所を始めた。

通所から1ヶ月程経った頃、面接で「I支援センターの利用者Bさんが、上から目線できつい事を言う。前に居た利用者がセンターを辞めたのはBさんのせいではないか」とB氏に対する強い不満を述べた。筆者は、やり取りを聞いていて、〈A氏がノーと言はず相手に合わせてしまう傾向があるのでないか〉と指摘した。するとA氏は、「理想を押し付けるのも押し付けられるのも経験してきた」と過去の親子関係の体験を話し始めた。「親の期待で、塾や空手に行かされた。ちょっとしたミスで両親に叩かれて育てられた。母はダメ親、男遊びして逃げた。知的障害なのに（塾通いは）無茶だ」と。そして、両親への憎しみや恨み、一方的な関係性に我慢して生きてきたと筆者に訴えた。過大な期待を感じながらも本人なりに努力してきたが、評価されなかったことや受容的な体験の少なさ、深い傷つきや絶望感が伝わってきた。B氏に関しては、「こらえるしかない。合わせてあげなきゃケンカになる」と述べた。筆者が〈ご両親との関係のあり方と同じですね〉と指摘したところ、「何で赤の他人に合わせなきゃいけないのであるのか。こういう思いをするために支援センターに行ったのではない」とイライラした様子を見せた。面接の終わりに筆者が〈B氏に我慢して合わせるのではなく、これまでとは別のやり方でも付き合っていけるようになると良いし、私はそれを手伝いたいと思っている〉とA氏に伝えると、「そんなの絶対できっこない！」と強い口調で否定した。筆者は、A氏の中に激しい怒りがあるのを感じて、この感情にどのように関わっていけばよいのだろうかと、今後の展開に緊張感を覚えた。

その後もA氏はI支援センターへの通所を続け、面接ではB氏への不満を訴えた。X年6月、「Bさんにこの間休んだことを注意された。Bさんは支援センターを仕事と思っているが、僕は遊びに行って

いる。意見が違う。Bさんとはやっていけない」と通所を止めると話す。また、「職員は仕事だから認めてくれている。Bさんはそれに気づいていない。職員は仕事だからBさんを否定しない。僕がいなくても支援センターの活動は出来る。僕は居場所を作ることを許されなかった」と、職員への不信感や支援センターを離れることへの複雑な気持ちを語った。辛そうに話すA氏に、筆者は通所を励ます言葉が浮かばなかった。A氏は「(自分の気持ちを)言ったらBが発狂して、殴り合いが公開処刑になる。だから僕がいなくなるかBがいなくなるかしかない」と話した。意見や自己主張をすることは、A氏にとって報復や争いに結びつく危険なもの、とイメージされていた。

(3) 我慢か爆発か (A氏の対処法)

(～X+1年1月)

I支援センターの利用中止から約1ヶ月後、A氏から「暇で仕方ないから、また支援センターに行き始めた」と、筆者に報告があった。I支援センターではお菓子を持っていき皆に配ったり、利用者の悩みの聞き役をしていると話す。そして再びB氏への不満を筆者に訴えるようになる。そのような中、突然「仕事を始めることにした。手始めにJ支援センターに行きます!」と筆者に宣言する。しかし、J支援センター見学後、「働きたくない気持ちに気づいてしまった。これでは皆から見放されるのではないか」と怯えたように話し、就労への複雑な気持ちの自覚と、自己のネガティブな側面は受け入れてもらえないのではないかという不安を示した。その後もI支援センターの通所は続け、何人かの利用者とは個人的な交流が活発になっていった。面接終了後、これから約束があるからと嬉しそうに帰っていく姿が度々見られた。しかし一方で、利用者や職員に対する不満(否定された、言動を注意された等)を訴えることも多かった。B氏に関しては変わらず「腹が立つ事を言われたが、笑ってごまかすしかない」と話す。

ある時、面接で「I支援センターで怒鳴ってしまった」と話す。利用者の発言に腹を立て、怒鳴り、泣いてしまったという。対応した職員から、しばらく休んではどうかと言われ「なぜ自分が追い出される

のか」と筆者に怒りを訴えた。また、「Bが嫌、殴り合いになるかもしれない」とB氏への怒りが高まっていることも話した。

その後、I支援センターのイベントの幹事に立候補したとA氏から報告があった。以降、努力しても職員が評価してくれない、協力してくれない、辛い思いを誰もわかってくれていない、という不満や怒りの訴えが直接で続いた。「仕事していた頃はわからなかったが、周囲とある程度つきあっていく必要性に気づいた」とA氏も自身の対人関係について考えていたが、「無理に明るく振る舞っていることを分かってもらえていない。でもグチを言ったり暗い所を出したら、親しくなった人が離れてしまうのでは」と恐れ、気持ちと裏腹に笑顔で対応し、却って不満を高めてしまっていた。

X+1年1月、面接で「I支援センターの利用者からの相談を電話で聞いてあげている。こっちが我慢する関係。○○さん(筆者)やI支援センターの職員はお金を貰って相談に乗る人だから素の俺を見せてもいいけど、利用者には、あくまで明るい俺を見てほしい。お金貰ってもいらないのに聞き役している。何が悲しくてやってるのか。ご機嫌伺い。最初はそうでもなかったがどんどん嫌になってきた。言っても相手にはわからない」と話した。A氏は相手と親しくなればなるほど、一方的な関係性への不満を募らせていった。

4 ソーシャルワーカーへの好意と怒り

(1) 筆者へ好意の表明

(～X+1年3月)

A氏は、親しく付き合っていた複数の利用者との関係でも「裏切られた。利用された」「問題が起きたら助けてほしい。グチを聞いてほしい」と筆者に訴えた。「I支援センターの利用者からの誘いや電話、イベントで、誰も一人してくれない。支援センターでまともに振る舞えるかどうかわからない。頭の中は戦争状態」と話した。そして「俺はお金や物が挟まないと信用できない。本音で話していないのではないか、ばれない程度に裏で言っているのではないかと思う」と常に不信感を抱えている辛さを話した。

X+1年3月、面接での何気ない話題から、A氏

が恥ずかしそうに筆者への好意を告白したことがあった。話した直後、慌てたように「気にしないでください」と付け加えた。

(2) 筆者への激しい怒り

(X+1年4月～X+1年9月)

B氏について「Bが実習生と2人でよく話している。何故Bの方が多くサービスを受けているのか。俺もできれば実習生と1対1で話したいのに許されていない。職員はBのイエスマン、B中心」と激しい怒りを訴えてきた。筆者は、自分も話したいという素直な気持ちを伝えてみるよう促したが「言ってもわかってもらえない」とA氏は繰り返した。間もなく、A氏はI支援センターに通うのを止めた。この頃、利用者との個人的な交流も全て途絶えていた。

その後の面接では父親について「働くと思えば働くだろうと言われ、眠れなくなった。怖くてご機嫌とりして余計にニコニコしていたので、病気が治ったと思われた」「一生働けない。病気が治っても就職の意欲が無い。今まで受けた差別等により働く気がしない。ずっと休ませてほしい。父に変わってほしい。俺の働く意欲を奪った。人を信じることもまともな恋愛する考えも奪った。精神的に俺を殺した。父は何やってもわからない人」と、理解してもらえない辛さや仕事への意欲を持てないことを父親への憎しみと共に訴えた。A氏は父親に対し、どうせわかってくれないと絶望しつつ、わかってもらいたいと期待した。また、「父は自分のために働けと言っている。働く気が失せるし、意地でも生活保護とかとことん周りをエサにして生きて行こうと思う」と父親への反発心を話した。筆者は、怒りや恐怖を感じながらも笑顔で振舞い、さらに自分を追い詰めてしまうA氏の対人関係のパターンについてDrと相談し、次の診察時は父親にも来てもらうことになった。A氏もこれに了承した。

診察日が近づいてくると、A氏は面接で「父に勝てるかどうか」「Drが100%俺の肩を持ってくれるかどうか心配」と怯えた様子で話した。A氏にとってこの話し合いの場は、相互理解に繋がるものではなく、勝つか負けるかの戦いと体験されていた。

X+1年9月、いつの間にかI支援センターの利用を再開し、年末のイベントで幹事を引き受けたと

A氏から筆者に報告があった。それからのA氏は「Bにケチをつけられたくないから」と準備に奔走した。そして間もなく「会費を集めて料理を用意したいのに、支援センターのやり方はおかしい。去年はBが幹事で、センター長から予算を貰ったらしい。会費制にしたいが、Bが認めないと違いない。俺にケチつけるためにBが幹事を勧めた」と訴えた。そして「去年と同じかそれ以上のイベントにしないとケチつけられる。でも自分が交渉してもだめに違いない。もう自分が全部お金を出すからそれで終わりにしたい」と苦しそうに訴えた。筆者は会費制に賛成だし、支援センターで提案してみるよう伝えたが、A氏は「受け入れられるはずがない」と応じなかつた。

イベントまではまだ数ヵ月もあったが、A氏は既に被害感に圧倒され、追い詰められていた。不眠症状も出ており、眠れるようになるかもしれないから筆者にお金（イベントの費用）を預かってほしいと渡してきた。

その後、I支援センターで、会費の話は出来たが、B氏が希望額を言わなかったことにA氏は憤り、筆者に訴えた。「最悪の時は預けてあるお金を使う」と話し、間もなくして、今度は「支援センターにしばらく行かない。幹事を降りる」という。筆者が預かったお金を返そうとすると「プライドがあるから返さないでほしい。そのお金でイベントをやるようにI支援センターに言ってほしい」と要求した。筆者が断ると「職員は中立じゃない。皆Bの言いなり。どうせ俺のやり方は通らない。俺はコミュニケーションを磨こうと思って支援センターや面接に来ていたが、それ以外磨かれてない」等と話し筆者に怒りを露わにした。また、A氏は「続けても今までの理不尽をまた味わわされるだけ。支援センターや面接は社会に出るための前段階。職員は教師なのに、教師役が教師をやらない場所では成長できない。これではいじめを隠ぺいする教師と同じ。職員はクズ。良い影響を受けられる人がいなくなった。○○さん（筆者）のことは、仕事が出来るので良い人だと思っていた。でも中立じゃない。俺は話し合いで解決できない。暴言暴力がないとできない。何かあると金で解決する。せめて中立に振舞ってほしい。そんなことしなくとも職員はお金貰えるから適当に

やってるだけなんだ」と話した。そして「幹事をやると言った以上プライドがあるのを○○さん（筆者）はわかっていない。Bに対して痕跡を残さないといけない。俺が支援センターや面接に行かなくなっても何も変わらない。利用されるだけの存在」と話した。

（3）筆者の忍耐と受容の試み

（～X+1年11月）

筆者はA氏の一方的な要求や、激しく相手を非難しながらも理解を求める混乱したメッセージを向かれ、耐えがたい不快や怒りを感じた。それと共に、これが今まで様々な人との間で繰り返してきたA氏の対人関係のパターンそのものではないかとも思った。ここで筆者が感情的に応答することは、自己主張や怒りが関係の破綻を招くというA氏の恐れを強化するのではないかと考え、筆者は忍耐強く受け止めていくことを徹底しなければと思った。

数週間後、筆者はI支援センターのイベントが、参加者少数のため中止になったと耳にした。そこでA氏に状況を伝え、預かっていたお金を返すこととした。

A氏はイライラした様子で「嘘だ。そんなことを言って、イベントをやるのではないか」と疑い、お金の受け取りを拒否した。そして、「本当にイベントをやらないかどうか当日見に行く。でも参加はしない」と話した。また、「幹事は引き受けざるを得なかった。Bや職員の絶対的な力が働いている場でやりませんなんて言えるわけがなかった」と話し、「気持ちを汲み取ってくれず、お金を返そうとした」と筆者を責めた。〈気持ちをわかっていないくて、ごめんね〉と筆者が返すと、A氏はしばらく無言の後、穏やかな態度で最近の日常生活についての話を始めた。

それからすぐにI支援センターの通所と筆者との面接を再開した。

5 両価的な感情の表明と対処行動の変化

（1）A氏の筆者に対する両価性

（～X+2年2月）

A氏がI支援センターの通所を再開したのと入れ違いで、今度はB氏が姿を見せなくなっていた。A

氏は「本当は、俺が幹事を降りたことをBが知っていて、幹事をやらされたくないから来ないのでないか」と筆者に話した。この時期以降、支援センターでの出来事にそれほど強い怒りを訴えてくることが無くなり、面接の頻度も減り始めた。

年末が近づいてくると、預けてあったお金の事を筆者に聞いてきた。A氏にお返しすると伝えるとあっさり受け取った。冬休みで支援センターがしばらく閉所になることに、「寂しい」と素直な気持ちを口にした。

X+2年、面接で「父の為に料理を覚えたいし、貯金もしたい」と今後に向けての前向きな話が出る一方、時々他者とのやりとりで要求が満たされない事があると激しく怒り筆者に訴えることもあった。そして「どうせ障害者は生活保護を受けてやっていいけどいいんだ」と希望の持てなさを話すこともあり、搖れ動く複雑な面を見せた。

また別の日、筆者が初回面接を振り返って尋ねると、A氏は「どうせPSWは知的障害者とかを監視したり見張る人だとわかっていたから緊張しなかった。そして実際にそうだった」と答えた。筆者は、強烈な恨みや被害感を唐突に向けられたようで、うろたえ、落胆し、A氏を支援していきたいという気持ちが揺らぐを感じた。常に疑われ試されているような状況に消耗もしていたが、この発言は、A氏自身が他者を信じられず、いつも見張っていないと裏切られたり利用されるのではないかという心配の裏返しであり、筆者に対しても、求めているけれど裏切られるのが怖いという両方の気持ちが現れているのではないかとも感じた。

（2）A氏の対処行動の変化

（～X+2年5月）

その後も面接で「どう頑張っても障害者。子は親の奴隸でしかない」等と話すことはあったが、納得いかない出来事を「ブンブンでした」という軽い表現で済ませられるようになったり、父親との関係でも激しい怒りを露わにして話すことがなくなってきた。

I支援センターの利用者と個人的な付き合いも再開し、それから夜もよく眠れるようになったと話す。だが「友達が出来てもいつ裏切られるかわからない。毎日地獄。自分の言う事は理解してもらえない

いのに、人の言う事は理解してあげないといけない」と常に不信感を抱えていること、一方的な関係性であると訴えた。

X+2年4月、久しぶりに面接を希望し、I支援センターの利用者とケンカをしたと話す。「利用者が俺に甘えてくるが、俺は素人だから病院を頼ってほしい。俺は支援センターでもこの面接でも甘えている」と話した。筆者はこの時期、A氏との関わりに疲弊していたが、A氏自身から「甘えている」という言葉を聞いて、A氏の言動の裏側には、受け止めてほしいという思いが確かにあることを、初めて実感できたような気がした。

X+2年5月、A氏はJ支援センターの通所も始めた。面接で「父は俺の金目当て。搾取されてきた」と話すことはあったが、2つの支援センターでの明るい報告も増えていった。職員に何か頼まれても「断った。それから気分転換にフレンチトーストを食べに行ってきた」と筆者に話した。

(3) 健常者か障害者か (～X+2年9月)

面接では「最近、自分が障害者と健常者とどちらで振舞えばいいか分からなくなってしまった。職場では障害者扱いされていた。今は自分だけ健常者扱い。障害者は甘やかされて俺だけ注意される。甘やかしている方もおかしい」と、これまでとは違う形で悩む。自分だけ大切にされていない、という訴えは続いたが「激おこプリン丸でした」と言って短く話を終えるようになる。活動量が増え、対処しなければならない事が増えてくると「今は色々な事が起きているから、どうしていいか分からなくなっているのだと思う。I支援センターをしばらく休むかも」と落ち着いて判断できるようになっていった。

そして、7月のイベントを最後に、A氏はI支援センターをしばらく休むことに決めた。

X+2年8月の面接では、イベントが終わってホッとしたのか、はしゃいだ様子で何度もガッツポーズをつくり「初めてストレスから解放されたかもしれない」と話した。

それからA氏はJ支援センターに毎日のように通った。そして間もなく、面接でJ支援センターの不満を訴えるようになった。「利用者がクズ。作業が

トロい。喋っているから自分が手伝っている。職員に訴えたが、これ以上は出禁にすると言われたので収めた。そもそも暇つぶしで利用し始めた。何で俺が理解してあげないといけないのか。なぜ自分が出禁なのか」と痛烈に非難した。それからも同様の訴えがしばらく続いた後「行くのを止めた。もう行くところが無くなった」と寂しそうに面接で話す。しかし、その翌週には利用を再開した。

(4) ピエロか少年兵か (～X+2年11月)

X+2年10月、筆者に「J支援センターのCさんにケチつけられてる気がする。恋愛の話でからかわされた。通所日を減らすとか、これ以上何か言われないように考えている」と話す。その後の面接で「黙っていたら、Cに、いつもと違うと言われた。ピエロになれば踏み台にされて、黙っていれば批判される」「爆発すると皆去ってしまう」「自分は恋愛したくてもしてはいけない人間。病気や障害があると幸せにできないから」等と話した。筆者は〈好意を持つのは自然なことだし、不満や怒りを感じるのも悪いことではない〉と伝えた。するとA氏はしばらく黙って、「周りはその都度言えって言うけど、子供の頃からそう育ったのだから変われない」と小さく答えた。そして「少年兵として戦っていたのだから、平和な世界があると言われてもそう思えない」と続けた。また「相手が変わるしかない。相手が変われば俺も変わると思う。グレーゾーン、話し合いの世界があると○○さん（筆者）は言っている。だが相手が話し合いできる状態ではない」と話した。A氏の頑なさに、話が平行線になりそうだと感じたが、少し前から見られるようになったA氏の言動の変化に伴い、筆者自身の気持ちも、以前に比べいくらく落ち着いていた。筆者が〈話し合いできる状態でないのは、Aさんの方でしょう〉と指摘すると、「話し合いしている。ヘラヘラして、やめてくださいよ～と歩み寄っている。それでも相手の態度が悪いから爆発するしかない」と話した。筆者は〈それは話し合いでない。ピエロになるか、爆発するか、Aさんはその間が無いのだと思う〉と更に指摘した。だがA氏は「みんな力でねじ伏せようとするのだから、自分もそうするしかないんだ」と話した。筆者

は、状況を変えていく力はA氏にもあると思っていることを伝えて面接を終えた。

6 就労の試みと挫折

(1) 就労の意思

(～X+3年1月)

X+2年11月末、面接で「貯金の為の口座をつくった。目標額まで貯まったら褒めてください！」と筆者に話す。12月、「お金を貯めたいのでA型事業所に行くかもしれない」と話した翌週には、スツ姿で現れ「A型事業所の面接を受けてきた。受かったらこの面接にも来れなくなる」と筆者に報告し、「○○さん（筆者）の顔を見るのが楽しみだった。寂しい。面接を止めたくない。癪癪起こしたこともあったけれど…」と素直な気持ちを話した。

それからの面接では「やっと希望を持ててきた。（もし不採用でも）この方針でやっていくつもり」「人との関わりで人は生きている。些細なことが集まって大きな支えになった」「支援センターのイベントや面接、やり切った感がある。この先大変になるが、それまで皆と良い思い出作れるといいなあ」と希望に満ちた前向きな発言が続いた。

ところが、事業所は不採用になった。A氏はショックを受けていたが、それでも「今、人生を十分に楽しんでいる」と話したり、J支援センターの利用者から「充電期間だね」と励まされていることを筆者に話した。

X+3年1月末、新たな事業所に応募すると、A氏から明るい表情で報告があった。そこで採用が決まり、2月から勤務を開始することになった。A氏は「体験利用2日目で、職員にむかついた」と話し、今後も対人関係上の問題が再現されると予測されたが、怒りの激しさの緩和と、適応的な対処行動が見られ始めたことから、以前と全く同じパターンではなくなるだろうと思われた。

(2) 就労開始

(～X+3年8月)

A型事業所への通所を始めてから、筆者とは診察時に待合室で話をした。

X+3年3月末、「体調不良なのに出勤したら、何人も休んでいて、仕事が増えて大変だった。職員が

ミスを俺のせいにした。言っても通じないと思う。休んだら、使えない奴だと思われるのではないか」と、事業所に対しての不満を話した。その後間もなく面接に来て「1週間休みを貰った。理不尽を感じていることを職員に言った。契約書を持って行って話した。仕事の能力は買われている」と話し、我慢でもなく爆発でもなく、これまでとは違うやり方でA氏が対処しようとしているのが感じられた。その後も、時々事業所を休んで面接を希望した。

X+3年5月、事業所の男性利用者と親しくなり、休日は一緒に遊んでいると話す。その後も事業所への不満は続いたが、「今後は合わせないで、自分の思う通りにやる。所長は厳しいが、好んでそうしているのではないと思う」と、落ち着いて話すことであった。X+3年7月、男性利用者から連絡が返ってこないと怒り、「段々、相手の我儘過ぎる部分が見えてくる」と話す。男性利用者もA氏を避けるようになり、付き合いは途絶えたようだった。事業所に対して「スタッフが利用者を甘やかしている。出来るなら俺も甘えたい」「自分は、作業は出来るが、面倒を起こすと思われている」と複雑な思いを話す。

(2) 退職と居場所のない苦しさの吐露

(～X+3年8月)

そしてX+3年8月、A氏は退職した。事業所のことを振り返って「職員は相談に乗ってくれても何もしてくれない」「健常者レベルの仕事を求められた」と話した。そして「もう働かない。生活保護を貰ってのんびり暮らす。障害者の所へ行っても健常者の所へ行ってもダメ。居場所がどっちにもない。自分がどっちだか分からない」と面接で話した。

7 考察

A氏は、居場所や理解されることを求める一方で、傷つきやすさや強い不信、不安、怒りから、適応的に振る舞ったり自己主張することができず、我慢か爆発、そして関係を一切断つという不安定な対人関係パターンを、父親を始めとするあらゆる対象との間で繰り返していた。敏感で良く気がつき、相手に合わせる傾向から、支援センターではすぐに利用者から好かれたが、A氏自身は一方的な関係に苦

しみ、受け入れられているという安心感に繋がることはなかった。

筆者は当初、A 氏が自身の対人関係のあり方に気がついていけるよう、出来事を一緒に話し合い、言葉で気持ちを伝えてみるよう促していた。しかし、A 氏の「言ったら殴り合いが公開処刑になる」という恐れは強く、我慢か爆発しかないというパターンがその後も繰り返された。

やがて、A 氏は筆者に好意を示した後、激しい怒りと不信感を向けてきた。その際、筆者は A 氏に対し強い拒否的感情を経験したが、これがまさに A 氏の対人関係パターンそのものであり、筆者との間にも同じことが起こっているのだと考えた。A 氏の生育歴からは、両親との間で安定した愛着関係が形成されなかつたことが推測され、A 氏から筆者に向けられていたのは、不安定な愛着関係の転移（母子関係が基本にあり、父親との関係でも転移されていた）であったと言えるだろう。

不安定な愛着関係を持つパーソナリティについて、Howe (1995) が Ainsworth によるアタッチメント分類では「欲求と怒り、依存と抵抗の表明」という両価性の特徴を持つと論じている。

転移に対し、筆者もまた両価的な気持ちに駆られたが（逆転移）、それはこれまでの悪循環を再演することに他ならないと考え、怒りや自己主張が「報復」や「関係破綻」には繋がらない体験となるよう、忍耐強く受け止める一貫した態度を保つように努めた。その後徐々に A 氏の言動に変化が見られるようになってくると、揺れ動きはあったものの、筆者の気持ちも安定していき、後半で〈話し合いできる状態でないのは、A さんの方でしょう〉と率直に指摘することが出来たのだと思われる。

クライエントから向けられる攻撃性を包容する意味について Salzberger-Wittenberg (1970) が Bion の理論を「自分の不安、攻撃性、絶望が受け容れられ、包容されていることに気がつくと、クライエントは自分の恐れ拒絶している部分とともに生きることができる人が確かに存在している、と感情の上で実感」することができるとし、また「それによって恐れ拒絶している部分は万能の力をふるうものではなくなり、そういった部分に対する恐れは減少する」と論じている。このプロセスが、筆者と A 氏の間で経験

されたことで、以降の A 氏の、少し緩和された形で不満を言えるようになったり、正直な気持ちを言葉にする等の変化に至ったのではないかと思われる。

黒川（2002）は、「人間は精神的に健康であればあるほど『社会的関心』(social interest) が強く、逆に、社会的に不適応の人ほど『自己中心性』(ego centricity) が強い」と述べているが、A 氏の場合も、自分で気持ちに対処できるようになってきたという上記の経験が、就労に向かう意欲（社会的関心）へと繋がったのではないだろうか。

また、A 氏は筆者との面接や 2 つの支援センターの間でも、離れたり戻ったりを繰り返した。これらがいつでも戻ってこれる場所として機能していたことも、怒りや自己主張が「関係破綻」に結びつくという A 氏の恐れを緩和させることに貢献していたと考えられる。

A 氏は A 型事業所を退職し、筆者との面接で、「もう一生働かない」とまるで以前に戻ったかのように同じ言葉を口にした。しかし人間の成長と変化は、けして右肩上がりのグラフのようにはいかず、行きつ戻りつの過程の中で再び起るものであると確信している。

補足であるが、本事例はソーシャルワーカーの役割について筆者に再考する機会をもたらしてくれた。ワーカー－クライエントは協働関係にある。クライエントには成長し変化しようとする力があり、ソーシャルワーカーはクライエントの持つ力や可能性を信頼し支援を行う。そのような関係の中でこそクライエントは持てる能力を発揮させ、支援は展開していくのではないだろうか。

そして、本事例で筆者は開始期から定期的なスーパービジョンを受けていた。クライエントから向かれる激しい感情に適切に対応し、関係の中で何が起きているのか理解するためには、スーパービジョンによる指導や支持が不可欠である。

引用文献

- David Howe (1995) *Attachment Theory for Social Work Practice*
Macmillan Press. 平田美智子、向田久美子訳 (2001)
『ソーシャルワーカーのためのアタッチメント理論 対人関係理解の「カギ」』83頁、筒井書房
Isca Salzberger-Wittenberg (1970) *Psycho-Analytic Insight and Relationships: A Kleinian Approach*, Routledge 平井正三

クライエントの対人関係における悪循環への介入

(監訳) (2007)『臨床現場に生かすクライン派精神分析』

150頁、岩崎学術出版社

黒川昭登 (2002)『臨床ケースワークの基礎理論』16頁、誠

信書房

受付日：2018年9月10日

受理日：2018年10月10日

